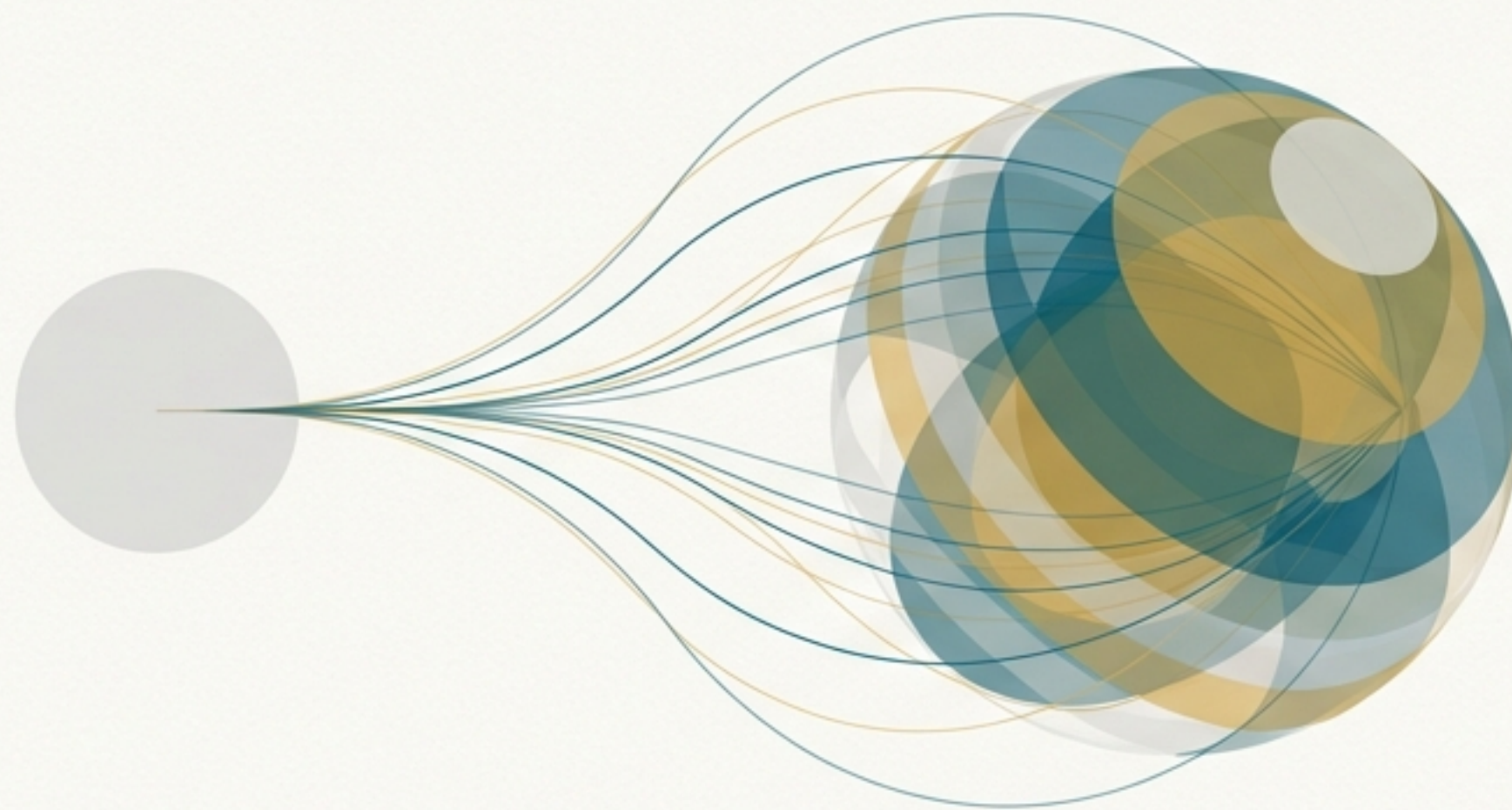


フラットな視点から、深い理解へ

多視点映像とオーラルヒストリーが拓く、授業分析の新時代



「授業技術の対象化」を実現するための方法論

優れた教師を育むために、 私たちは何をすべきか？

教師の専門的成長には、自らの授業実践を客観的に振り返る機会が不可欠である。

ビデオ録画は、実践を記録し、省察を促すための強力なツールとして広く活用されてきた。

優れた授業の映像は、教員を目指す学生にとって、実践力を学ぶための有用な教材となる。

しかし、従来の方法には、そのポテンシャルを最大限に引き出すことを妨げる、根本的な限界が存在する。

一つのレンズが映し出すもの、そして見逃すもの



従来のビデオ記録は、授業という複雑でダイナミックな営みを捉えるには、あまりにも多くの制約を抱えている。
カメラのフレームの外で起こる無数の出来事は、記録されず、分析の対象にすらならない。
私たちは、教室の「影」を分析しているに過ぎないのかもしれない。

この限られた情報から、本当に深い学びは得られるのだろうか？

従来型ビデオ記録が抱える2つの根本的課題



① 視覚の狭さの問題

- 一台のカメラでは、教師の表情と、それに応答する児童の様子を同時に捉えることは不可能。
- 教師を撮れば児童が見えず、児童を撮れば教師が見えない。
- 注目したい子どもがフレームの外に出てしまうと、その活動を追跡できなくなる。



② 臨場感の欠如の問題

- 映像では、その場にいる観察者が感じる音声の響きや、他者の存在がもたらす身体的感覚が失われる。
- 人間の視覚に比べ、ビデオの撮影範囲は狭く、現場で見た景色がそのまま記録されるわけではない。

これらの制約は、不完全な分析と学習機会の損失に直結する。

観察の新たな次元へ：「多視点映像」という解決策

「視覚の狭さ」の問題を克服するため、複数のカメラで授業を同時に記録する。このアプローチにより、観察者は固定された一つの視点から解放される。



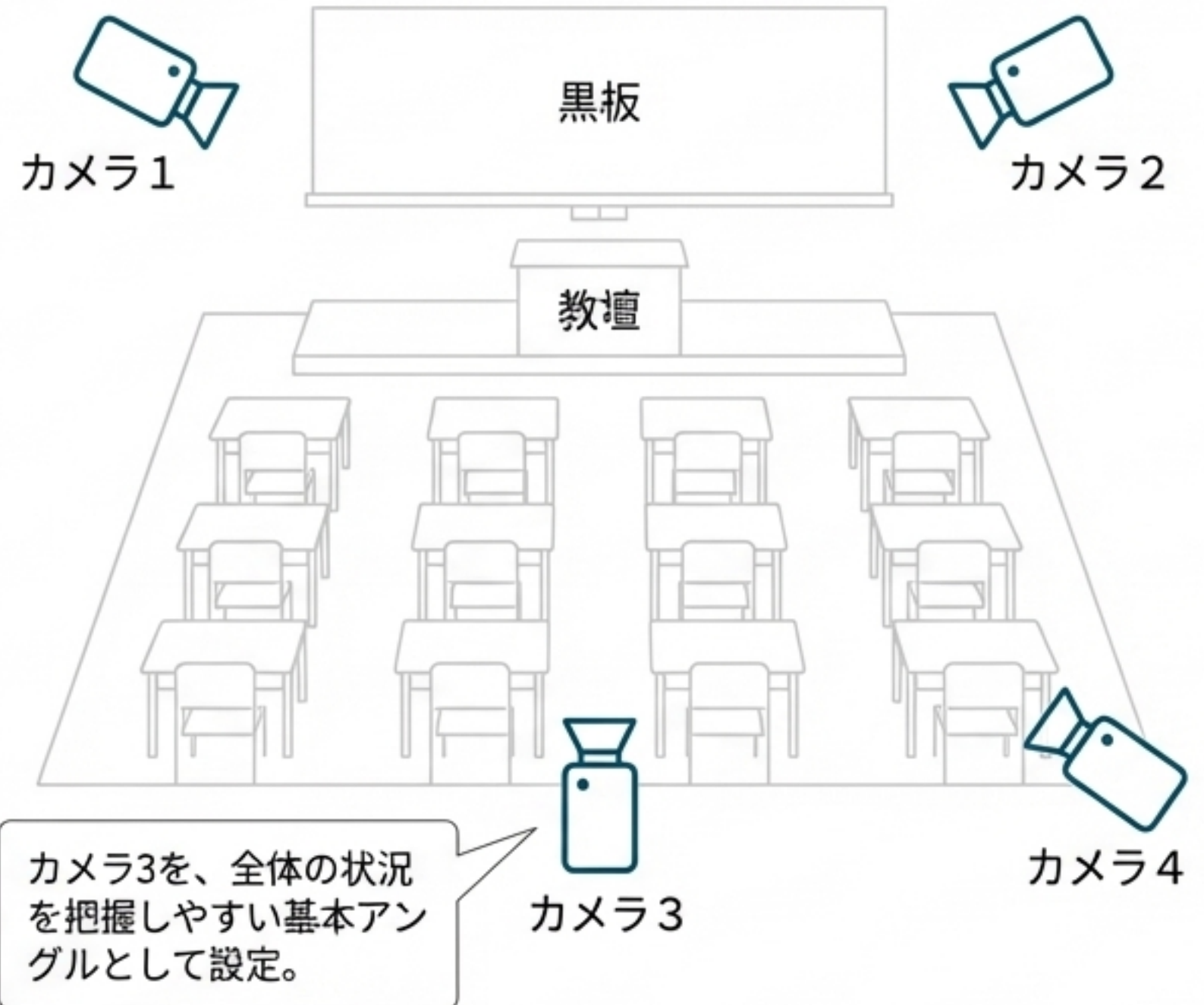
4台のカメラが、教師、児童、そして教室全体の状況を同時に記録。観察者は後からでも、自分が立っていなかった場所からの視点で授業を分析できる。

実践の記録：小学校3年生・道徳の授業

この新しい手法を検証するため、実際の授業を対象に多視点映像教材を作成した。

- **実践:**「素直な心」
- **対象:** 小学校3年生
- **授業時間:** 50分
- **カメラ:** 業務用ハイビジョンカメラを4台使用

カメラの設置位置



映像だけでは見えないもの： 指導者の「意図」を捉える

何が起こったか（What）を捉えるだけでは不十分。
なぜそれを行ったか（Why）を理解する必要がある。

そのために、私たちは「オーラルヒストリー」の手
法を導入した。

オーラルヒストリーとは：体験者（授業者）にその体
験を口述してもらい、記録・分析する手法。「記憶を
歴史にする」試み。



授業後、授業者と学生によるインタビューを
実施。授業者の教育技術の背景にある児童
観、教材観、指導観を明らかにする。

オーラルヒストリーで明らかにする 「思考のプロセス」

インタビューでは、観察しただけでは分からない
授業者の判断や配慮について深く掘り下げた。

- 児童への発問をどのように工夫しているか？

- 児童に発言させる際、どのような点に配慮しているか？

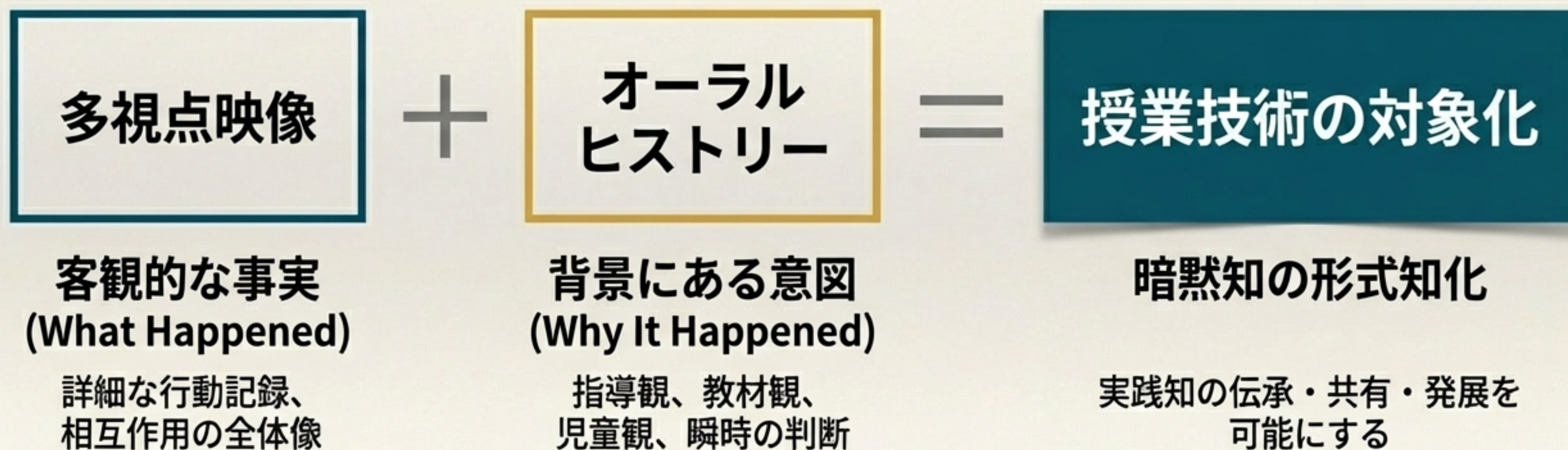
- 机間指導時に、なぜ児童のプリントに丸をつけたのか？

- 音読の途中で、なぜその内容を板書したのか？

- 子どもを注目させるために、どのような方法を用いているか？

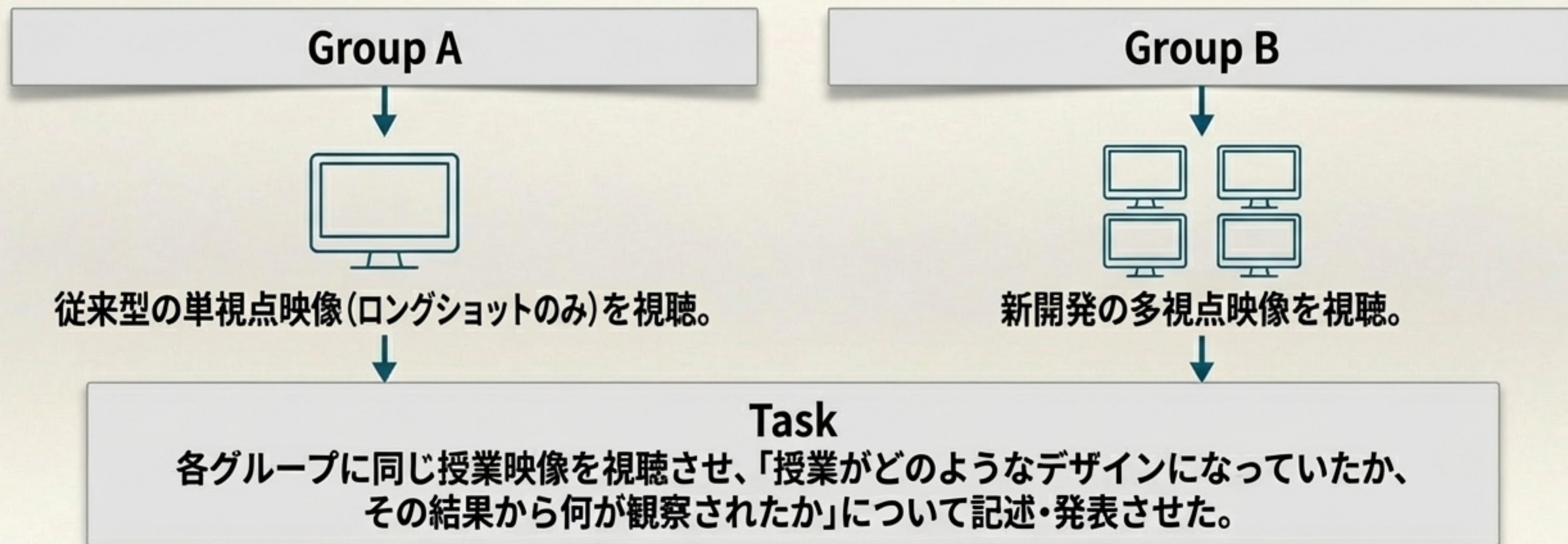
これが「授業技術の対象化」である

授業技術の対象化とは、暗黙知である指導スキルを、誰もが分析・検討可能な「対象」として客観的に記述すること。



新しい手法は、学習者の視点をどう変えるか？

開発した教材の有用性を検証するため、大学の講義で学生を対象とした比較実験を行った。



観察の「解像度」に生まれた、明確な差

従来型DVD（単視点）の感想

授業の全体像把握に
焦点が当たる傾向。

「授業の概要を
つかみやすい」

多視点映像DVDの感想

子どもの活動や教師との
相互作用への具体的な着眼。

「児童の表情・動きが
よくわかる」

「先生がどの児童に視線を
送っているのかがよくわかる」

目的で使い分ける、映像教材の新たな可能性

単視点映像の有効性

授業の大きな流れや展開を把握させたい場合に有効。

多視点映像の有効性

- 学習者一人ひとりの関心に基づいて、授業を多角的に、深く観察させたい場合に極めて効果的。
- 教師と児童、児童と児童の相互作用など、より微細な分析を可能にする。

多視点映像は、表層的な理解を超え、授業実践の核心に迫るための分析ツールである。

研究から実践へ：次世代の教員養成への応用

この手法は、単なる研究に留まらない。教員養成の現場でこそ、その真価を発揮する。



「教職実践演習」

学生が自らの模擬授業を多視点で記録・分析し、より深い自己省察を促す。



「教育実習」

実習中の授業を記録し、指導教員と共に多角的な視点からリフレクションを行う。

教員として必要な資質能力を、より確実かつ効果的に育成するための
新たなスタンダードとなり得る。

誰もが「深い分析」を実践できる時代へ

かつては専門家のものであった映像編集技術は、PC、ソフトウェア、映像機器の低価格化・普及により、今や全ての教育者が利用可能になった。

多視点からの授業観察は、もはや特別な研究手法ではない。

それは、自らの実践を深く見つめ、専門性を高めようとする
全ての教師のための、強力なツールである。

授業を見る「目」を変えることで、教育の未来は変わる。